

# 平成 29 年度第 1 回飯田市総合教育会議 会議記録

日時：平成 29 年 12 月 26 日（火）

午後 1 時 00 分から 2 時 30 分

場所：飯田市役所 A301・302 号会議室

## 1. 開 会

(今村総合政策部長)

みなさん、こんにちは。お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。ただいまから、平成 29 年度第 1 回総合教育会議を始めます。私は、この会議の意見交換まで含めまして、司会進行を務めさせていただきます、飯田市総合政策部の今村です。よろしくお願いたします。最初に、牧野市長からあいさつをお願いいたします。

## 2. あいさつ

(牧野市長)

みなさん、こんにちは。本日は暮れも押し迫った大変ご多用な中にもかかわらず、平成 29 年度第 1 回総合教育会議を開催いたしましたところ、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。また、教育長をはじめ、教育委員の方々におかれましては、日ごろから飯田の教育振興のために大変なご尽力をいただいておりますことに、改めて敬意と感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、昨年度は 2 回の総合教育会議を開催したところでございました。その中で、「結」を理念として掲げます「飯田市教育大綱（2017-2020）」を定めまして、「地育力による 未来をひらく 心豊かな人づくり」に取り組んでいく飯田市の教育行政について、有意義な懇談をすることができたと考えております。

この「飯田市教育大綱（2017-2020）」であります、今年度から始まりました「いいだ未来デザイン 2028」と「第 2 次飯田市教育振興基本計画」とを有機的に結びつけ、市長部局と教育委員会とが連携・協力して、ビジョンの実現に向けた取組を行っていく内容となっております。

私も市政懇談会におきまして、市民のみなさんの声を聴く中で、大変厳しい市の財政状況ではあるわけですが、児童館・児童センター・児童クラブの開所時間を午後 6 時 30 分までに延長をいたしますとともに、就学援助におけます給食費の全額支給等、本年度も積極的に取り組ませていただいております。また、上村小学校を指定した小規模特認校の取組に対しましても、市長部局もこれに協力しながら進めさせていただいております。

12 月に開かれた飯田市議会第 4 回定例会では、教職員の働き方改革が取り上げられたところでございました。私は、こうしたことは喫緊の課題と捉えているところでありまして、この総合教育会議におきまして、教育現場の声も含め、教育委員のみなさんから率直なご意見を賜りたいと考えております。これからも飯田市の教育のあり方をみなさんと一緒に考え、進めていければと思っておりますので、どうか本日も有意義なご議論ができますように、よろしくお願申し上げます。私からのあいさつとさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いたします。

(代田教育長)

みなさん、こんにちは。本日は師走の大変お忙しい中、お時間をいただきまして、ありがとうございます。市長も述べられましたように、今年度は第2次教育振興基本計画のスタートの年です。さらに、今年度からは、市の総合計画である「いいだ未来デザイン 2028」と結びつけた飯田市の教育大綱ということで、「結」の理念大綱が始まった年でもあります。その理念大綱の1番目には、第2次教育振興基本計画が順調にいくように、「組織と計画を結ぶ」という大きな理念を掲げさせていただいております。

本日の平成29年度第1回総合教育会議の中で取り上げる4つのテーマは、第2次教育振興基本計画の大きな柱に位置付けられたものだと考えます。教育委員のみなさんから出していただいた、1番目の「地域の柱となる人材育成について」。これは第2次教育振興基本計画の3つ目の大きな柱である「ふるさと飯田への愛着を育む」の中で、ふるさと学習やキャリア教育を推進していこうというところと関連することかと思えます。また、2番目の特別支援教育では、4つ目の柱である「豊かな心を育てる」の中のインクルーシブ教育の推進、3番目の「地域資源を生かした地域づくり・人づくりについて」では、11番目の柱である『伊那谷の自然と文化』の学究・普及・継承・活用を推進する、4番目の「地域全体での英語教育への取組について」では、2つ目の柱である「グローバル時代を生きる力を育む」というように、12の柱の中から4つの柱に関するテーマを選んでいただいたと考えております。

この計画がスムーズに進むためには、先ほどの教育大綱の理念でも言いましたが、「組織と計画を結ぶ」という「結」の精神で取り組むことが大事だと考えており、この精神で計画の柱を話し合うことで、総合教育会議も非常に有意義なものになるのではないかと思います。よろしく願いいたします。

### 3. 意見交換

(今村総合政策部長)

ありがとうございました。それでは、意見交換に入らせていただきます。今日の会議は午後2時30分までということで、限られた時間ではございますが、今教育長が言われた4つのテーマで意見交換いただきます。

進め方は、テーマごとにまず教育委員のみなさんからご提案、ご意見等のご発言をいただき、それをふまえて市長からコメントをいただきます。その1回のやりとりで終わりではなく、さらに教育委員のみなさんからのご意見をうかがうということで、何分という時間で切るということではなく、しっかり議論いただきたいと考えております。ですので、用意しました4つのテーマについて、すべての意見交換が終わらないということがあれば、会議の終盤でみなさんにお諮りして、残りのテーマは次回に行うということもあるかもしれませんが、この総合教育会議は市長と教育委員のみなさんの意見交換の場ということで、充実した会議にできるように進めてまいりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、1つ目のテーマの「地域の柱となる人材育成について」に入ります。このテーマについて、ご発言のある教育委員の方は、挙手いただければこちらで指名いたしますので、よろしく願いいたします。小林職務代理、お願いいたします。

## (1) 地域の柱となる人材育成について

(小林職務代理)

今、市長のごあいさつの中でも、教員の働き方改革に触れていただき、若干それとも関わるかと思いますが、教職員の現状についてご理解いただきながら、お願いをしまいたいと思います。

「ふるさとに誇りと愛着を持つ」、そしてまた、「一度ふるさとを離れても、ふるさと飯田に帰ってくる」。そんな人材を育てるために、地域の人材育成をどのようにしていくかということ、教育委員会として非常に大事に考えています。たしか4年前だったと思うのですが、総合教育会議という名称で行う前に、市長と教育委員との懇談会を行いました。そのときに、市長からの提案ということで、この飯田の自然や歴史、風土等をよくわかっている教員が子どもたちを具体的に教えていくということも含めて、飯田で教員を採用して、飯田で人事異動ができるようなことができないかという提案をいただいたことを記憶しております。

少し遡って考えてみますと、当時の一般教員の人事異動は、県内を4つのブロックに分けたうちの3ブロックを経験しないと、出身地には戻ってこれないという体制でありました。飯田市出身の教員が飯田に戻ってくるのは30歳を越えてしまっており、それから飯田・下伊那の歴史について学び直すのでは遅すぎるということが、1点目の課題としてありました。もう1点は、下伊那教育会の中に郷土調査部がありまして、その中に歴史委員会、生物委員会、地質委員会等々の委員会があり、基礎的、基本的な学問研究を行っていますが、その組織に、飯田・下伊那出身の若手の教員がいないというような状況が生まれていました。

そのため、「早く飯田・下伊那に帰ってきて、飯田の文化や自然、歴史を研究し、それを基に、ふるさとに愛着を持てるような子どもたちに育てていく、そうした体制を作っていくことは大事だ。」と考えていましたので、市長の提案を「その通りだ。」と思いました。その後、市長も、県や市町村との懇談会等で精力的に発言していただいていると思いますし、私も県の教育委員会の「人事のあり方委員会」の委員という立場から、そうした方向性で話をさせていただいてきました。県の教育委員会は思った以上に早く、人事制度の改革に動き始めまして、一昨年からは教員の初任者は地元で配置するようになりました。飯田・下伊那出身者の最初の赴任地は飯田・下伊那ということで、教員が出身地で地についた教育ができるようになりつつあるのではないかと思います。

ここで1つ、大きな問題があります。それは、飯田・下伊那出身の教員が少ないということです。現在の飯田・下伊那の教員数は、正規の教員114名、常勤講師181名ですが、この正規教員のうち飯田・下伊那出身者は61%で、残り4割は他地方の出身者なのです。飯田・下伊那出身者を全県から集めても、93%にしかならないのです。そのような状況から、県の教育委員会では、今まで全県で新規教員を採用していたものを、来年度から南信・中信・北信・東信の4つのブロックごとで採用するように動き始めています。少し具体的に見てみますと、南信の中でも上伊那は充足しており、飯田と諏訪が少ないのです。そのため、今までの課題は若干解消されるかとは思いますが、これから南信ブロックでの採用となっても、飯田・下伊那の出身者が増えるかどうかは、まだ懸念されます。

そこで11月末に、飯伊市町村教育委員会と下伊那校長会で懇談会をもちまして、今後の対策を考えました。1つ目は、今、教員の働き方改革が求められるように、教員という職業が長時間労働であり評判のよくない職になっているということ、それから子どもや保護者への難しい対応の中で、傷ついている教員が多いということから、教員になろうとする若者たちが減ってきているというようなことがあります。そこで、高校生の時期から、キャリア教育、進路指導等で教員の良さをもっとアピールしながら、教員を目指す若者たちを増やしていく必要があるのではないかと確認でき

ました。

2つ目は、教員採用試験に合格できずに、講師として働いている人たちが多くいるわけですが、そういう若い講師の先生方が正規の教員になれるように、飯田女子短期大学や教育事務所、市町村教育委員会、校長会等が連携して支援していくことが大事ではないかということ。

それから3つ目は、教員志望の学生に対して、給付型の奨学金制度を南信州広域連合等で作ることはできないかということ。介護人材の確保という点で、そうした制度が成立しているというお話をお聞きしていますが、これを教員志望の学生へ対象を広げて、飯田・下伊那出身の教員が飯田・下伊那の子どもたちを本気になって育てる、そんな体制を作っていくことができないかと考えています。そうした点で市長から、また広域連合長としての立場から、ご支援いただければありがたいと思います。

(今村総合政策部長)

他にいかがですか。三浦委員。

(三浦教育委員)

「地域の柱となる人材育成について」ということで、私が考えておりますことを発言させていただきます。先ほど、市長、職務代理からお話がありました教員の働き方改革に関しましては、すべての学校に学校訪問をさせていただく中で、先生たちの授業が本当にそれぞれ違うという感想を持ちました。先生方がいろいろな研究会で勉強されて、その中で授業準備もされていますが、やはり、きちんとした授業研究や準備をされて、それを授業に活かしていくということは、本当に時間がかかるわけで、そこをしっかりとやっていただくのが本来の先生としての職務なのだというところも、肌で感じたところです。そのため、そうしたことに対する時間の確保をしっかりと考えていかなければいけない、それが子どもたちの教育のためだということを感じたところです。

その中で、先ほど職務代理からもお話がありましたキャリア教育についてですが、特に講師をされている飯田・下伊那出身の先生方に対しては、飯田女子短期大学で、教員採用試験関係の対策講座を行っています。一般教養の講座には在生学生もいますが、2～4割、10～20人程度の一般の方が受講されており、学校の職務に就いている講師の方に、地元でのそうしたキャリア支援に対するニーズはあるのではないかと感じるところです。こうしたキャリア支援は、飯田女子短大として、周りの教育事務所などでどういった支援をしているかを把握しないまま行っていますので、地域の教育機関との連携がとても大切だと思います。

地域の教育機関との連携ということに関して、もう1つ、思うところがあります。この地域の職業関係の高校には、飯田 OIDE 長姫高校、下伊那農業高校があり、飯田風越高校には国際教養科という語学関係の学科もあります。そうした高校もあり、また短大やビジネス関係の専門学校もありますが、飯田市にとってこれらの教育機関でどういう学びが必要なのか、教育機関でできることと地域のニーズとを一度きちんと同じテーブルで話してみて、飯田市のまちづくりの視点から、今ある教育機関では何ができるかということを考えてみることも必要で、また大事なことはないかと思います。

専門知識と技術の習得という点で、考えていることがあります。これは特殊な例ではあるかもしれませんが、私が勤務している学校で行っている介護福祉士の養成講座の中で、資格を持たずに介護現場に就職した人たちの離職率が高いということを聞いたことがあります。学んだ学生からは、基本的な知識と技術をしっかりと身に付けたとき、その仕事が大変な仕事からやりがいのある仕事へと、や

っている内容が変わっていくという話を聞いたことがあります。学んだ後の離職率はすごく低いという話も聞いたりする中で、やはりきちんとした学びを提供したうえで、地域に出ていくことが大事で、そうしたことが、延いては飯田市に定着することになるのではないかと思います。「なんでも地域へ」というのではなく、きちんとした知識を付けたうえで地域に出ていくことが、後々の地域定着につながっていくのではないかと考えたりもします。

航空機システムの研究等という大きな教育ビジョンがある中で、地域のソフトを支えていく教育形態では、しっかりとした専門知識、技術を地域に根付く人たちが身に付けられる環境を、教育としてきちんとしていかなければいけない、また、この飯田市にあるすべての教育関係者の中で、そうした話を議論できる場があったらいいということを感じます。

(今村総合政策部長)

他の委員の方、よろしいですか。それでは市長、お願いします。

(牧野市長)

小林職務代理、ありがとうございます。それから三浦委員、ありがとうございます。地域の柱となる人材をどう育成するかということは非常に大きな課題で、私も市長就任以来、先生方、委員のみなさんと議論させていただいているテーマだと思います。

先生方の人材育成をどう進めていくかという議論は前々からさせていただいて、先ほど、いよいよ教員採用が4ブロック制で行われるという話まで進んでいるということをご報告いただき、これまで言ってきたことは無駄ではなかったということを改めて思いました。実際、当地域出身の先生方が少ないという話はその通りであり、なるべく先生になる人材を確保できないかということで、今いろいろとご提案いただいたとっております。

やはり一番は、若い皆さんに先生になろう、なりたいと思ってもらえるようなアピールはいると思うのです。昔はいろいろな先生がいらっしゃいましたが、教育長や私の学生時代には、「先生というのは怖いな」と思う先生が、学年に1人や2人いたのではないかと思います。でも、そうした先生に怒られて学ぶことも多かった気がします。最近はそのような感じではなく、友達みたいな感覚で先生を捉えている部分もあるのかなと時々思ったりします。要するに、理想の先生像をどういうところに求めていくか、その部分が若い皆さんに対するアピールとして必要なのではないかと思います。

講師や臨時的な先生から正規化に向けてということについて、どうのように支援していくか、あるいは、給付型の奨学金制度ができないかという話ですが、南信州広域連合で行っているのは看護師養成に対する給付型の奨学金です。看護師を対象として今年度から始めており、最初は5人程度集まればと思っていたところ、応募が13人程あったため、今年は10人程を奨学金の対象にさせていただきました。行政だけではなく、医師会でも協力しようということで、実際にそうした話もしています。地域全体でどういった支援ができるかということは、改めて考える必要があると思います。

地域として教員がどのくらい必要かということについて、上伊那は充足しているが、諏訪と飯田は地域出身の教員が不足しているという話が出ましたが、逆に言うと、上伊那が充足できている理由をどのように見ているのかをお聞きしたいと思います。もちろん出身は非常に大きな要素だと思いますが、他地域出身の先生でも飯田・下伊那を好きになり、地域に関する教育も熱心に行ってくれる、そういうやる気のある先生であれば、そうした先生を確保できないかという考え方もあるかと思うのですが、その辺りをどのように考えるか、聞かせていただければと思います。

三浦先生がおっしゃっているように、高校教育のあり方は、今、私も国の経済・財政諮問会議やまち・ひと・しごと創生本部の KPI 評価チームなどの国の制度に関わる審議会や委員会の中で、よく意見を申し上げさせていただいているところです。職業高校だけではなく普通高校を含めて、高校3年間の教育のあり方について、文部科学省の考え方がはっきりしないのでないかとずっと申し上げてきて、このところようやく、高校教育にもスポットを当てていくという状況が出てきています。実際に文部科学省の高校教育担当者が、11月に飯田 OIDE 長姫高校を視察されておりまして、高校教育をどのように考えるか、現在文部科学省内でも検討している状況かと思えます。

結局、我々のような4年制の総合大学を持たない地域ですと、だいたい7割から8割の若いみなさんが高校の卒業をきっかけとして離れていってしまうわけですが、離れる直前の3年間はとても大事な期間だという捉え方が、国全体でもされていなかったというのが実情かと思えます。いろいろな所で話をさせてもらっているとわかるのですが、産業集積がある程度ある飯田地域では、約7割程度の皆さんが離れていく状況ですんでいるのですが、産業集積がなかなか乏しい地域によっては、9割以上の若い人たちが離れていってしまう状況があると聞いており、やはり非常に大きな課題なのです。

人口減少、少子化、高齢化の中で、9割の若い人たちが高校卒業と同時に地域を離れてしまうということは大きな課題で、ある程度は若い人たちが残ってくれている地域のことを聞いて逆に思ったのですが、離れていった7割の若い人たちのうち、どれだけの人が地域に帰ってきてくれるのかを考えたとき、地域を離れる前の3年間の高校教育が、果たして今のままでいいのかという意識はずっと持っています。そうした地域のニーズと教育との関係をどのように見直していくのかということはとても大事と考えています。これまでやってきた中で1つの典型である飯田 OIDE 長姫高校の地域人教育について、市の社会教育を担当する公民館を中心に行っていることは、全国的なモデルになると思います。これは、私が言っているというよりはむしろ、文部科学省の高校教育担当者も同じ見方で飯田 OIDE 長姫高校を視察してくれたので、これからこうしたことを、どのように全国的に展開していくかという検討がなされるのではないかと期待しています。

専門教育や技術の習得がどうあるべきかという話については、時代のニーズ、地域のニーズに沿う形で、教育が行われているかということだと思います。きちんとした学びがないと、就職してもすぐに離職してしまうということは介護職に限りません。今は3年で約3分の1の人がどの職業に就いても転職すると言われますが、それでいいのかという意識かと思えます。せっかく学んだのに、せっかくその職業に就けたのに、職業が自分と合わないという形で離れることもあるかと思えます。そういった意味では、三浦委員がおっしゃったように、やりがいを持てる形で学びを地域の中にどうつくっていくかということは、とても重要だと考えますが、そこは義務教育だけではなく高校教育まで含めて、そしてその後の大学教育まで含めて、考えていく必要があるのかもしれないと思いました。

(今村総合政策部長)

ありがとうございました。教育委員の方の意見に市長からコメントをいただきましたが、それをふまえて、いかがですか。小林職務代理。

(小林職務代理)

ご質問をいただいたと理解いたしましたので、わかる範囲で答えさせていただきます。地域出身の教員数が上伊那は充足していて、諏訪・下伊那が少ないのはなぜかという理由はわからないのですが、県下の中で地域出身の教員が少ない地域はどこかということ、木曽、北安曇、飯水、それと下伊那・諏

訪なのです。諏訪以外は、県の外れというか、県境近くのいわゆる人口減少がかなり進んでいるところなのです。こうしたことを考えると、その地域の子どもたちの数も少ないということも1つあると思います。これからの高校改革について、時間があれば触れさせていただこうと思いますが、飯田・下伊那は、学ぶ機会が少し不足しているのではないかと感じるわけであります。

もう1つ、4割の先生方が他地域から来ていて、その先生たちが飯田に定着してくれるといいのですが、その人たちは20代、30代の若い先生たちなのです。ゆくゆくは地元に戻りたいと思っている先生たちですので、出身地域に戻ってしまいます。そうすると飯田・下伊那の先生が足りなくなってしまう、講師、非常勤講師で補充せざるをえなくなります。そういう意味からすると、飯田・下伊那は講師の割合が高い地域で、講師が悪いわけではないのですが、正規の教員が安心して働けるような環境をつくっていくことは、教育委員会としても責任をもってやっていくところだと認識しております。

(牧野市長)

小林職務代理は、理想の先生像をどのように考えますか。

(小林職務代理)

理想の先生像。私が1つ言えるのは、子どもの立場に立って考えられる、子どものことに関しては労を惜しまない、そういう先生なのだろうと思います。

(今村総合政策部長)

市長からのコメントに対して、三浦委員はいかがですか。

(三浦教育委員)

教育委員をさせていただいて、小学校、中学校の教育、義務教育の部分をよく見させていただいたときに、その後の高校3年間、その後の短期大学、4年制大学が教育上の一連の流れとして見えたということがありました。飯田市のまちづくりの点からは、私の考え方は抽象的かもしれませんが、飯田市のまちづくりとして描く教育は、それぞれの点ではなく線をつないだような形で、今ある組織や機関などの連携が図れ、新しくできるものも大切にして、飯田のいい教育形態ができたらと思いました。市長から具体的な話をいろいろとお聞きしたので、自分の考え方の抽象的な部分もわかりましたし、その中で組織や機関の連携を図っていくことも、考えていけたらと感じました。

(今村総合政策部長)

「地域の柱となる人材育成について」で、他の委員の方からご発言等はよろしいですか。そうしましたら、2つ目の「特別支援教育『生まれてから就職するまでの支援』について」に入ります。

## (2) 特別支援教育「生まれてから就職するまでの支援」について

(小澤教育委員)

7月の三遠南信教育サミットで豊川市を訪ねた際に、静岡県磐田市の施設を見学させていただきました。その中の1つに、飯田でいうと「こども発達センターひまわり」のような、磐田市から民間に

委託してできた新しい施設があり、そこでは肢体不自由なお子さんから知的障害のお子さんまで最新の設備で素晴らしい療育が行われており、その隣にはリネンの工場とパン工房も作られていました。その施設を利用して育った子どもたちが、学校に通うようになったら夕方にそこを利用して、夏休みや長期の休みにも利用する。やがて成長した時には、その施設を利用して働く力を身に付けて、いずれはジョブコーチの手助けなどをいただきながら、地域の職場に出ていくという素晴らしい施設でした。パン工房でも、実際にパンを作って販売をするハンディを持った人たちの姿がありました。さらに、ハンディを持つ小さな子どもたちも、作業着を着てパン作りを体験することができるということで、きっとその子たちも、お兄さん、お姉さんの姿を見て、私たちもこういう働く人になりたいという希望を持ち、また、その子たちの親も、この子たちはいずれこうやって働くことができるのだと知る上で、大変素晴らしい施設だと思って見てきました。

飯田市はどうなのだろうと思ったときに、実は飯田市のことをあまりわかっておらず、いろいろと教えていただいたのですが、飯田市ではハンディを持つ子ども、支援が必要な子どもたちの早期発見、早期支援に大変力を入れているということを知りました。幼稚園や保育園に相談員の方が回り、就学相談も年に何回も行われていて、また、この6月に発達支援体制整備協議会が設立され、動き始めたということで、大変期待をしています。

先ほど、先生方の働き方改革のお話があり、先生たちも大変お忙しいとは思いますが、特別支援の先生だけではなく、やはり現級の先生にも障がいのことをよく理解していただき、さらにクラスのお友達、校長先生、教頭先生をはじめとする学校全体、それから地域の皆さんにも、障がいのある子どもたちを理解してもらうことが1番だと、常々私は思っております。自分の子どもの発達に遅れがあることを知った時の親は、本当につらい思いをします。その時に家族、おじいちゃん、おばあちゃんが理解してくれていれば、心強く子育てをしていけます。

また、その子たちが大人になった時、本当に障がい重い子どもの場合、支援を必要としながら施設で働いていくという道がありますが、障がいが軽い子どもの場合、一般就労しても、地域の方々の理解が得られないと就職後すぐに辞めたり、また引きこもったりということも多々あると聞いています。ですので、小さな頃から周りの方が理解していただける社会を作っていく方がいいのではないかと感じてきました。

学校訪問に行かせていただき、先生方も3観点をういた本当に素晴らしい授業を行っており、先生方は大変だと思いますが、支援を必要な子にわかりやすい授業というのは、他の子どもたちにもわかりやすいので、どんどん広めただけるといいなと感じました。

(今村総合政策部長)

ありがとうございました。他の方、いかがですか。

(牧野市長)

今のお話はまさに学校現場のお話なので、小林職務代理、いかがですか。

(小林職務代理)

今小澤委員から、障がいをもつ子どもたちを特別支援学級の先生だけではなく、普通学級の先生も子どもたちも地域の人も、理解することが一番大事だとお話があったのですが、教育現場では遅れているところかと思えます。それが一歩でも前進するようにと、昨年からは副学籍という制度を始め



させていただいて、特別支援学校に通う子どもたちが、地域の学校の行事などに参加できる体制はつくられてきたと思います。

その中で、3観点による授業ということを言われたのですが、「今日の授業はこんな目当てでこんな順番で授業していくよ」ということがわかると、発達に障がいを持っている子どもたちは安心して授業が受けられる。そのことは、実は一般の子どもたちにも大事だと言われており、ユニバーサルデザインということで、教育現場の中で広がってきているところかと思います。

また、進路についての話がありましたが、これも市長にご理解いただきたいと思っている点です。統計を見ますと、飯田・下伊那の知的障がい学級の中学生の50%は、特別支援学校の飯田養護学校高等部に進学します。自閉症・情緒障がい特別支援学級の中学生の62%は、全日制の高校に進学しますが、進学した高校でうまく対応できるかということが大きな課題としてあるわけです。このことに対応するために、多部制単位制高校である長野県箕輪進修高校がありますが、この高校に飯田・下伊那の子どもたちは通えないのです。長野県の今回の「高校改革～夢に挑戦する学び～」の中で、ぜひ飯田・下伊那に多部制単位制高校の分教室をつくっていただきたいと考えています。発達障がいの子もたちだけではなく、不登校だった子どもたちや外国籍で学び直しが必要な子どもたちなど、年間40人ほどの子どもたちは、多部制単位制高校の分教室があれば行けるのです。私も教育関係者から県の教育委員会に、学び直しができるような、また個別に応じた学びができるような、多部制単位制高校の分教室を飯田・下伊那につくっていただきたいと前からお願いしているのですが、なかなか動いておりませんので、この点についても機会があればご助力いただきたいと思っています。

(総合政策部長)

ありがとうございました。他の委員さんはいかがですか。

(牧野市長)

今お話があったように、飯田市では、特別に支援が必要な子どもたちに対しては、なるべく早くから手を差し伸べて支援をしていこうという考え方でやってきていまして、「こども発達センターひまわり」や「こども家庭応援センターゆいきっず」などでの取組も、飯田ならではの部分がけっこうあるのではないかと、私は思っております。静岡県磐田市の事例もご紹介いただきましたが、まさにそうした切れ目のない支援をどういう形で展開していくかが、これからも非常に大事な視点だと思っております。特に幼少期から小学校入学ぐらいまでの支援は、目に見えてきている部分だと思いますが、学校の中、あるいは高校に進学する時、そうした支援が今どこまでいっているのかという点で、小林職務代理からもお話しいただいたと受け止めました。

高校については多部制単位制高校の話もいただきましたが、飯田女子高校が通信制を始めたということで、1ついい方向が出ていると捉えております。いろいろなやり方があり、その中である程度選べるようになれば、選択肢が増えれば、それだけ必要な支援を受けられる子どもたちも増えていくのではないかと思います。

やはり、先ほどから出ていますように、地域の理解と先生方の理解、その両方が必要だということはその通りだと思います。理解が必要であることはみなさんわかっているのですが、何をどう理解していいのか、どういう形で理解してもらうのがいいのかというところを、もう少し具体的に先生サイド、地域サイドで考える必要があるのかと思います。その辺りはもし小澤委員から、こういうところをもっと理解してもらえればという部分があれば、教えていただけるとありがたいと思います。

(小澤教育委員)

そうですね。わかりやすいところと言えば、車いすの方には段差でスロープが必要なように、知的障がいや文字での理解がしにくい方には視覚支援は、有効な手段の1つだと思います。

(牧野市長)

車いすの方に対して必要な時は支援しなくてはということは、見ればわかるという部分があると思います。しかし、おっしゃるように、見た目ではわからない知的障がいの方や本当に発達障がいかどうかかわからないような軽い方の場合は、先生方にどのような理解をしてもらえばいいのですか。その辺りはどのような感じですか。

(小澤教育委員)

視覚支援というのは、誰が見てもわかりやすいということだと思います。知的障がいや文字での理解がしにくい方がわかるということは、一般の方もわかるということなので、日常的に視覚支援があるといいのではないかと、私は思います。

(牧野市長)

日常的な視覚支援ということですね。

(今村総合政策部長)

他の委員の方からのご意見はいかがですか。

(小林職務代理)

障がいを持っている子どもたちの特性を理解して、その上で、どのように特性に応じた支援を周りができるようにするかということですが、実は一般の教員も、ADHD（注意欠陥／多動性障がい）やASD（自閉症スペクトラム障がい）などについては、なかなか理解が足りていないのです。私たちも今、よく勉強しなければいけないと思っていますところでは。

飯田市教育委員会として取り組んでいる中の1つに、夏休みに行く、教員を対象としたカウンセリングマインド研修会があります。その研修会は、今までは一人一人の子どもたちを大事にするように、カウンセラー的な資質を身に付けようということで行っていたのですが、それだけでは足りないだろうということで、一昨年あたりから発達障がいの講座を設けて、新しく飯田市にきた先生や希望する先生たちに勉強してもらいだしたところでは。

今、教員も障がいを理解するところから始めたのですが、先ほど申し上げましたように、副学籍制度でいろいろな子どもたちが仲間として入ってきますので、そのことを通じて、PTAの研修会や子どもたちの学級会などでも、徐々に理解をってもらうということが最初だと考えております。

(小澤教育委員)

そうした障がいに対する理解は必要なので学んでいただくのですが、クラスに来る支援が必要な子どもは、同じ障がいを持っていても一人ひとり違うので、やはり関わっていただく中で理解していく必要があるかと思います。例えば、私も障がいを持っている子どもがいるのですが、小学校に通う時

に、「この子はこういう子です。こういうことがすごく好きで、こういうことは苦手です。」というお便りを作りました。こうしたこともすごく必要で、障がいを持つ子どもと付き合うためには、その子の特性を知って、理解をして付き合っていく。また障がいを持つ違う人と出会った時は、こういう面も持ちながらまた違う部分もあるとわかっていただくのもいいのではないかと思います。大きな講演会などで学んだ後ですが、障がいを持つ子どもと接する場合は、こういう子なのだかと理解して貰ってもらった方がいいかと思います。

(牧野市長)

まさにそうした個別の支援については、先ほど話をしたように、早期発見、早期支援をして、それを継ぎ目なくつないでいこうという考え方を持っていますので、幼稚園・保育園、小学校、中学校、あるいは高校までかもしれませんが、いかにバトンがうまくリレーされていくかということだと思います。先生方が変わっても、障がいを持った子どもさんの情報がきちんと共有されていていくかどうかというところが、非常に大事だという気がします。

障がいを早期に発見して、その子の特性を大事にしながら上手く発達支援につなげていく体制を、「こども家庭応援センターゆいきっず」と教育現場とが上手く連携して展開できるかということも、大事ではないかと思います。

(小澤教育委員)

実際問題としては、担任の先生が変わるときに、引継ぎがなかなかされていないのではないかとこの現状で、また一からお話をしていく、一から理解してもらおうということがほとんどです。先生方も激務なので、大変だとは思いますが、現状としてはそのような感じです。

(三浦教育委員)

発達障がいに関しては、知的障がいを伴うもの、伴わないものがある、複雑な形で様々な子どもさんがいらっしゃると思います。先ほど、小林職務代理が言われたように、学習障がい、多動性、自閉症スペクトラムなどがある中で、そこに知的障がいを伴う、伴わないものがあり、個別に支援をするという体制が組まれることは、本当に必要だと思います。

ですが、学童期になって勉学が始まり、努力するけれども、学習障がい等で授業がなかなか理解できない子どもさんが、そこで不登校になったり、またはいじめになったりというようなことも踏まえると、保護者や教員を含め子どもに関わる人たちがやはり基本的な知識を持って、一人ひとりの子どもをみることができるといことが大切だと思います。実際、障がいを持つ子ども一人ひとりに特性があるということで、その子どもに関わる人たちは、その特性に合わせるということが本当に必要だと、今、お話を聞いて感じました。

(牧野市長)

教育委員会は、健康福祉部の子育て支援課と、そうしたところで連携していこうという話は進んでいないのですか。

(小林職務代理)

それは進んでいます。飯田市教育委員会の相談室にいた方が、子育て支援課に配置されて、連携が

より取りやすくなっています。

(牧野市長)

お二人のお話を聞いて思ったのですが、情報を共有できる仕組み、共通シートみたいなイメージですが、それをどうやって作っていくかだと思います。先生が変わるたびに一からお子さんの特性を説明することは、おそらくご本人にとっても親御さんにとっても相当エネルギーがいる話だろうと、今のお話を聞いて思うので、そこがスムーズに共有ができる仕組みというものはできないかと思うのです。

(小林職務代理)

小中連携・一貫教育の中で、9年間にわたって障がいを持つ子どもの個別の支援計画を持ち、その子がどのような状況でどういう支援をしていくと良いということをつないでいけるように、それも保育園やその前からつながっていくようにと、今、動き始めているところです。これから本格的になってくるところだと思いますが、そうした仕組みづくりに動き出しています。

(牧野市長)

子育て世代の皆さんのそうした負担をなるべく軽減していきたいという思いは、非常に強くあります。特に、何度もお子さんの障害について説明しなければいけないということは、相当負担が大きいと思われ、軽減できる方法はないかと考えるところですので、ぜひその仕組みづくりを進めて、実のあるものにしてもらいたいと思います。

(今村総合政策部長)

このことについて、他にご発言はよろしいですか。では、3番の「地域資源を生かした地域づくり・人づくりについて」に入らせていただきます。ご発言のある方はお願いします。

### (3) 地域資源を生かした地域づくり・人づくりについて

(伊藤教育委員)

「地域資源を生かした地域づくり・人づくりについて」ということで、教育長も触れられておりますが、来年は風越山開山1,300年を迎えるというタイミングということで、風越山について触れさせていただきます。

風越山は飯田市民のシンボルの山として、地域の多くの人に愛されて、支えられている山です。その象徴的な団体としては、「風越山を愛する会」や風越山の麓で活動している「猿倉の泉保存会」があり、また、丸山地区では、麓で桜の木やベニマンサクなどを植える「風越山麓わくわくプロジェクト」が組織されています。少し異色なところでは、飯田西中学校の「探鳥会」というものがありまして、1963年に始めた取り組みが今の生徒たちに脈々と引き継がれ、飯田西中学校に行くと、風越山麓にいた鳥のはく製があるのです。このように、風越山は市民や地域の方々に愛されています。

本日話したいことは、風越山が持っている地の利をぜひ生かしたいということです。飯田市に限った話ではないですが、少子化、高齢化による人口減少が進んでおり、特に上村地区では、教育委員会が関わって小規模特認校の取組を行っています。私は丸山地区の今宮町に住んでいますが、今まで今

宮町一、二、三丁目でやっていた正月のどんど焼きが、一丁目に子どもがいないために、このお正月は二丁目、三丁目だけで行うというように、少子化の波がどんどん来ているという現状です。そうした中で、ぜひ風越山の地の利を生かして、人が多く訪れてくれる地域を目指したいと考えています。

人が多く訪れる地の利は、第1にロケーション、第2にアクセスとよく言われます。ここで、東京都八王子市にある高尾山を例に出しますが、高尾山は年間に250万人の登山客数が訪れ、その登山客数は世界一です。高尾山のロケーションとアクセスを考えますと、アクセスは新宿から1時間、高尾山の標高は599mで、麓からは400mぐらい登るというロケーションです。要するに、関東一円の人たちが短い時間で行け、そして山が登りやすいということです。

これは、風越山の地の利に当てはまると思うのです。リニア中央新幹線の開通を見据えますと、風越山は都心だけではなく、中京圏、いずれは関西圏の3大都市からもアクセスが良くなり、1時間で来られるようになります。風越山の標高は1,535m、麓がだいたい500mですから、標高差が1,000mぐらいありますので、健脚な方向きだと思います。

しかし、風越山の前山に虚空蔵山というキーになる山があります。虚空蔵というのは、虚空という障害物のない空の状態を蔵しているということで、つまり眺望がいいということです。登るとわかりますが、虚空蔵山は実にビューポイントです。そして、虚空蔵山の麓からの標高差は600mぐらいですから、非常に登りやすいのです。

北アルプス、浅間山、八ヶ岳といろいろな山がある信州の百名山の81番が風越山ですが、その百名山の中で、私は都会から最も近く、そして最も登りやすい山が風越山だと思います。ここはリニアの時代に向けて、この地の利を生かして、なんとか人を多く集まるようにしていきたいと思います。そして、その周辺にあるかざこし子どもの森公園、押洞の風越山麓公園もきれいに整備されており、この辺りにある遊休地では、研修施設、あるいは宿泊施設の整備などの工夫ができるのではないかと思いますので、ぜひ多くの人に来ていただきたいと思っております。

今、AI、人工頭脳のことを話題になっており、2045年にはシンギュラリティというように、人工頭脳が人の頭脳を超えるのではないかと言われています。そのため、今は週休2日制ですが、今後はだんだんと仕事から解放されて休暇が増えてくると思うのです。そうしたときに、人は健康が大事で長生きをしたいと考え、やはり自然の中にいたいということになり、今の風越山の考え方は時代ニーズに合って、多くの人を訪れるになるのではないかと思います。

(代田教育長)

私からも「地域資源を生かして」ということで、来年は風越山の価値を再発見できる、非常にチャンスな年だと思っています。というのも、風越山開山1,300年ということで、飯田市美術博物館では特別展の準備を進めています。また、毎年10月の体育の日に行なってきた風越登山マラソンは、地区の行事や様々なイベントと重なり、これまで600~700人ぐらいの参加だったのですが、来年は開山1,300年記念のため、多く市民のみなさんに楽しんでもらおうと、現在10月下旬の開催で準備を進めているところです。

その中で、こういうのは面白いのではないかというアイデアの1つに、その登山マラソンをトレイルランのような形として、海外の人たちのニーズに応えることができないかという意見が出ています。さらに観光と結びつけて、今年クールジャパンアワードを受賞した南信州の農家民泊を体験して登ってみるというような連携することにより、様々な形で飯田に海外の人を呼ぶというように、まさに10年後を見越した一手を打つのにいい年ではないかと考えています。これは教育委員会だけではなく、

全庁的に地域資源の再発見をしながら取り組んでいきたいと思ひます。

(今村総合政策部長)

他には、よろしいですか。では、市長からお願いします。

(牧野市長)

風越山に対する思ひは飯田市民なら誰しも持ってもおかしくないというくらい、飯田のシンボルとしてある山という認識です。毎年6月1日に行われている「風越山を撮ろう」という風越山を写真に撮るイベントも、風越山に対する関心の高さをうかがわせるものだと思ひます。高尾山の話は、私もよくリニア中央新幹線開通の話と絡めて話しています。風越山、野底山という非常に魅力的な山が飯田市内には身近にあるので、そうしたものがリニア時代になると、高尾山のように注目を集めるのではないかと、またそうしていく必要があるのではないかと申し上げているところです。

今お話がありましたように、ビューポイントとしては虚空蔵山から見る景色が非常にいいと思ひます。その上の風越山に行くと、実は景色があまりよく見えないというところもあり、むしろ権現山という別名で呼ばれるように、昔は修験道の人たちの修行する道場のような役割を果たしていたのだらうと思ひ、それだけ歴史のある山だと理解しています。これからどのような活用をしたらいいのかということは、今ある公園の機能やスポーツ・体育的な機能と合わせて考えて、研修機能や宿泊機能については、教育長からお話があったように農泊と組み合わせるなど、飯田ならではの考え方があるかと思ひました。

これはどちらかというとなんて体験教育の話かと思ひますが、学校現場ではこうした山登りはどう捉えられているのか、風越山に限らず、里山をどのように学びの対象にしているのか、逆にお聞きしたいところです。先生方は風越山に登ったことがありますかと聞きたくなるのですが、その辺りはどうですか。

(小林職務代理)

風越山に関しては、多くの小学校で6年生の遠足のコースになっており、飯田市内で風越山が見える学校は登っていると理解しています。飯田のシンボルの風越山に登ることは、かなりハードでもありますので、子どもたちを鍛えるという面も含めて行っていると思ひます。ただ、中学校の登山に関しては、少し課題が出てきています。

(牧野市長)

私たちの世代は西駒ヶ岳に登っていましたが、今はそのことが少し難しくなっているのですね。

(小林職務代理)

はい。難しくなっています。

(三浦教育委員)

小学生の遠足で登るという話もありましたが、高校では競歩などで登ることが今でもあるかと思ひます。様々な教育機関で、風越山に登っていると思ひます。

(牧野市長)

先ほど教育長から話がありましたが、風越登山マラソンが典型で、こうしたところに若いみなさんが多く参加してくれるようになればいいと思います。飯田市美術博物館を中心にして、風越山の歴史的な背景を含めた学びを、開山 1,300 年の節目の年にもう一度しっかりすることができればいいと、私も思うところです。

風越山の固有性というのは、様々な側面から理解する必要があると思っています。橋南の今村光利さんから聞いた話ですが、風越山が京都の北山になぞらえられており、京都の北山と同じ位置関係で、飯田のまちづくりの配置がなされているということです。小京都と言われるためには、必ずしも山が北になればならないということではなく、位置関係がそうならいけばいいのだということでした。ですので、「東野」という地名も、実際の地図で見ると北にあるにも関わらず、北山である風越山から見て東の方向にあるので「東野」というように、そうした位置関係を表すということでしたね。

そして、北山の存在というのはやはり水源地を指すようで、京都の北山も水源地がある所で、それをしっかり守っていくという考え方で大事にされています。風越山の後背地はまさに水源地ですから、風越山もやはり飯田の命の源、水がめという意味でも、非常に大事な山なのです。私も今村さんからの話を聞いて学んだのですが、そうした風越山の様々な点が学びの対象になり、様々な観点から風越山を見直していくのに、来年の開山 1,300 年はいいい機会ではないかと思っています。

それから、風越山のあまり難しくない山登りは、健康にもいいと思います。風越山には、毎日登っていらっしゃる方が何人もいると聞いていますが、私が大分にいたとき、臼杵市にも風越山と同じような山があり、お医者さんで「その山に一週間に何回登りなさい」と書いた処方箋を渡す人がいるという話を聞いたことがあります。

(今村総合政策部長)

他の委員の方、よろしいですか。では、次のテーマの「地域全体での英語教育への取組について」に入ります。

#### (4) 地域全体での英語教育への取組について

(代田教育長)

市長もご存知のように、2020年から全面実施される小学校の新しい学習指導要領に対応する形で、来年度から小学校3、4年生で外国語活動が始まります。「小さな世界都市」を標榜する飯田市としても、英語教育はしっかりやっつけようということで、教育振興基本計画の中にも位置づけて実施していくわけですが、先生方の負担が少ないような形で、子どもたちには外国語の語学力がきちんと付くように、教育委員会として現場の支援をしていきたいと考え、その1つとしてICTの整備を考えています。電子黒板やデジタル教科書は発音もいいですし、先ほどから話に出ている視覚的に学ぶ上でも重要なツールだと思いますので、整備していきたいと考えております。また、外国人の外国語指導助手であるALTの先生の人数についても、教えるコマ数も増えることから、多くする必要があるだろうと思います。さらに、実際に海外の先生に学ぶ遠隔英語教育にも挑戦していきたいと考えておりますが、これには予算が伴いますので、これからご相談させていただきたいと思っております。

ここまでは他の自治体でも実施しているものですが、ぜひ飯田らしい英語教育の取組ができないかと考えています。来年度は世界人形劇フェスティバルが開催されるということで、そのことが学校の英語教育だけではなく、市民全体の英語教育と結び付けていく機会になればと思っております。実際

に市民ボランティアの中に英語の通訳ができる方がいらっしゃると思いますが、これを機会に、英語の通訳ボランティアや市民ガイドを組織化していくといいのではないかと考えております。それをいきなり8月に実施することはなかなか難しいので、8月までの間で海外の方が来るような機会には、適宜そうした市民ボランティアを募る形で、だんだんと活動が活発になるような仕掛けを、新年度から取り組んでいけるといいと思います。

そして、世界人形劇フェスタティバルの開催ということで、各中学校区に少なくとも1団体は海外劇団が来るという数になってきます。目標としては、20地区すべてで海外劇団の公演ができればいいのですが、少なくとも中学校区ではできるような形になったときに、そこで英語でのおもてなしなどの英語に触れる機会ができます。先ほど話した英語の市民ボランティアを、こうしたことと結び付けていくことをできれば、まち全体での英語によるおもてなしができるきっかけの年になるのではないかと思います。繰り返しですが、これは教育委員会だけではできないことですので、その意識を持ちながら市長部局と一緒に進めていければと思いますし、ゆくゆくはリニア中央新幹線が開通した時、海外からくる人たちに全体でおもてなしができるまちになるように、この10年間で準備ができればと思っています。

(今村総合政策部長)

この件につきまして、他の委員の方からご発言がありましたら、お願いいたします。

(小林職務代理)

人形劇フェスタの際に、飯田東中学校の生徒がりんご並木のガイドをしておりまして、非常に好評でした。中学生たちも自分たちが手入れをしているりんご並木を見直す、いいきっかけになったのではないかと思います。これを外国人向けに英語でできないかと思いますが、そのために学校や教員に負担をかけてしまうと、それこそ働き方改革と逆行していきますので、また違う仕掛けができないかと思うわけです。

1つの手段とすると、飯田風越高校の国際教養科や飯田高校などの高校生で英語の堪能な人たちや人形劇フェスタにボランティアで来る大学生と一緒に、さらに市民の人たちも巻き込んで、英語で飯田のりんご並木をガイドするということが考えられます。それを1つのきっかけとしていくことが、これからの国際化にとっては大事だと思っています。

(今村総合政策部長)

関連して、他の委員の方はいかがですか。

(小澤教育委員)

勉強不足で申し訳ないのですが、世界人形劇フェスティバルと全国高等学校総合文化祭、総文祭の開催とは、時期が重なるのですか。

(牧野市長)

そうです。世界人形劇フェスティバルの期間中に、総文祭が開催されます。

(小澤教育委員)



総文祭の人形劇部門は、飯田が会場になるのですよね。そうすると、今の小林職務代理のお話のように、高校生が多く関われるのではないかと私も期待しています。

(牧野市長)

総文祭の人形劇部門には、どのくらいの高校が参加しそうですか。

(代田教育長)

人形劇に取り組んでいる高校は、全国的にもそれほど多くはなくて、総文祭の人形劇部門に参加する高校数は、まだ確定していない状況です。

(牧野市長)

今、いろいろな形で高校に参加を呼びかけさせていただいております。英語教育についてですが、来年度から小学校3、4年生でも行うということですが、先生方の準備はある程度なされているという理解でいいのですか。

(小林職務代理)

移行措置が始まり、各小学校で来年度からどのように3、4年生で英語教育に取り組んでいくか、学校現場の希望も聞きながら、事務局で研究を進めております。ただ、一朝一夕に力がついていくわけではないので、ソフト面の部分からも支援をしていかなければいけないと思います。

(牧野市長)

その部分は、先ほどのICT教育の話とも関係してくるわけですね。

(代田教育長)

そうです。英語の発音が苦手な先生もいるかと思います。それを一から発音しろ、教科書を読めというのなかなか難しいため、発音の部分はデジタル教科書に任せるといった役割分担をしていかないと難しい話だというのが、教育現場を見る中での率直な感想でありますので、教育委員会としても支援をしていきたいと思っています。

(伊藤教育委員)

ここ2、3年といった近い話ではないのですが、実はこの英語のことについて話す機会がありました。これは夢のような話ですが、飯田に英語の単科大学があってもいいのではないかとこのものです。まちの国際化や世界都市という目標をおくと、飯田市での英語教育にも弾みがでて、また、全国から集まりやすい場所にもなることをふまえますと、英語の単科大学への総合的な流れが作れるかもしれないという夢を語ったことがあります。

(牧野市長)

軽井沢にインターナショナルスクールができて、その学校がそういった役割を果たしていくのではないかとこの見方もされています。ですので、インターナショナルスクールのような学校のイメージもあるかなと思います。

飯田市は国際交流推進協会を中心として、国際交流にも非常に力が入っている地域だと思っています。英語圏のみならず、いろいろな言語を母国語とするみなさんが飯田に住んでおられて、そのみなさんと交流する中で、自分も何かすることができないかという思いも生まれてくるのではという感じもします。国際交流の夕べでは、多くの高校生がボランティアで参加していますので、そうしたみなさんがもっと増えていけばいいと思います。

そういう意味では、来年度開催される世界人形劇フェスティバルや AVIAMA 総会は非常にいい機会であり、むしろその機会を学校側からも積極的に利用できればいいのではないかと思います。教育長からお話があったように、そこを見据えて準備できればいいのですが、その開催をきっかけとして、何かをやるようになってもいいと思います。やはり何かきっかけがないと、あるいはそこに目標がないと、英語教育へのモチベーションを高められるのかということもあるかと思います。その点からすると、来年はいい機会ではないのかと思いますので、ぜひこの機会を生かせるような仕掛けをたくさん作っていけるように、一緒に考えていければと思います。

また、今年の3月には、ロンドンビジネススクールのみなさんが飯田に来ましたが、今度はフランスから最大で65名が来る計画がありますので、このこともいい機会になればと思います。

(総合政策部長)

限られた時間の中で、4つのテーマについて議論していただきましたので、駆け足になった部分もあるかと思いますが、しっかりと意見交換をしていただきました。ありがとうございました。これももちまして、意見交換の予定の項目は終わります。

## 5. 閉会

(牧野市長)

本日は平成29年度第1回の総合教育会議ということで、教育委員のみなさんと大変実のある議論をさせていただいたことに対しまして、お礼を申し上げます。どの課題も一朝一夕に解決するものではないと、もちろん理解しておりますが、総合教育会議で情報や意識を共有しながら、課題解決に向けての歩みを進めていくことができればと改めて思ったところであります。

来年に向けては、節目の行事もありますので、それをきっかけとして様々なチャンスが広がっていくのではないかと思います。

教育委員のみなさんにおかれましては、これからもそれぞれの立場から、この地域の教育振興にご尽力いただければと思うところであります。今日は本当にありがとうございました。

(今村総合政策部長)

以上を持ちまして、総合教育会議を閉会させていただきます。